



↑泉町産のヤマトイモ（猛暑の影響で全体的にイモが小ぶりの年となった）

ヤマトイモ

<ヤマノイモ科ヤマノイモ属>

- 主な栽培地
泉町



生産の歴史的由来

ヤマトイモはヤマノイモ属に分類されており、一般に出回っている長芋やとろろ芋と呼ばれる芋と同類ですが、このヤマノイモという名称は自然薯^{じねんじよ}、大薯^{だいじよ}の総称で、世界では約600種ほどあるといわれています。形状も栽培方法も多様で、一言でまとめるのは困難ですが、現在日本で栽培されているヤマノイモ属の仲間たちは、中国の華南西部原産のものといわれています。

ヤマノイモの仲間は、正倉院の文書の中で、天皇に献上された野菜の一つとして、その名が登場するほど歴史のある野菜です。しかしこの時点ではまだ栽培を思わせる記述がないため、恐らくこれは野生のものを示しており、栽培種が日本に導入されたのは、さらに後代になってからのことではないかといわれています。

イモの形から、円筒棒状形のナガイモ群、扁平で扇形と短系の棒状のヤマトイモ群、球形のマルイモ群に分けられますが、泉町玉露や近隣の下川で栽培されているヤマトイモは、短い棒状のものです。

もともと海退して生まれた土地である泉町とその周辺は、ヨシの生えるような湿地帯が広がり、藤原川、矢田川、釜戸川のたびたびの氾濫により、上流からの土砂が堆積し形成された経

緯があります。特に玉露は釜戸川のデルタ地帯にあたり、現在のような区画整理が成される以前は、1 mも掘れば水が湧いてくるような地下水の豊富な土地であり、湿地を好むヤマトイモの栽培に適していたことがうかがわれます。

豊かな水資源に恵まれた環境のもとで、玉露周辺の農家で作っていない者はなかったというほど、盛んに栽培されていたヤマトイモですが、区画整理で土地の質が激変したことや栽培農家の兼業化を受け、現在は栽培者、収量ともに減少の一途をたどっています。

泉町

土は変われど今なお息吹く作物

泉町は、もともと農業が盛んで、かつては市場を構え、常磐炭鉱への食糧需給の中心地としても栄えていました。

ヤマトイモの栽培が続けられている泉町玉露、泉町下川は、いずれもここ数十年で環境が激変した土地です。

玉露は区画整理事業により宅地化が進みました。土地全体に土が盛られたため、畑の土質もすっかり変わり、昔ほど良い芋は採れなくなったと言います。

下川でも、特に大畑地区は、もともと山だったところを開墾してできた、畑作中心の土地だったそうですが、現在は放置されたままの荒地が目立ちます。長人参や大根などの栽培が盛んで、良い野菜が豊富に採れましたが、海岸線は工業地帯と化し、バイパス道路の整備などに伴い、農地・農家が激減しました。自宅と畑が離れた場所にある人も多く、高齢化の進む中、畑に通いきれなくなったことも大きな要因となりました。

それでも栽培者の一人は「芋の掘り出しだけは、家族にもやらせねんだ。楽しみだし、難しいがね」と、掘り起こしてみるまで分からない、生長した芋と対面する瞬間の楽しみを語っていました。苦労などなかったと一笑する栽培者たちの姿には、土壌の変化や干ばつなど、幾多の苦難を乗り越えられた自信と逞しさを感じずにいられません。

栽培方法

当地区では、露地栽培を行っています。

まず、初年期、3月中旬までに配合肥料や鶏ふんを散布して耕起します。3月下旬以降、そこに種芋を植え付け軽く土をかけておきます。

4月下旬～5月上旬に、芽が出てきたら乾燥や雑草防止のため、畝に藁を敷きます。

7月中旬頃、野菜配合肥料を追肥します。

11月～12月になり、茎葉が枯れたら芋を掘り起こします。カゴなどに入れて、納屋や倉庫等湿気の少ない場所で、二年期の植え付け時まで保管します。翌年の3月下旬～4月上旬に、二年期の植え付けをします。初年期と同様に栽培を進め、最終期に備えます。

最終期も3月下旬～4月上旬に植え付けし、同工程を経て、12月～1月によく待望の収穫です。栽培者の中には、自家消費分の栽培にとどまっていることを理由に、二期目で収穫する方もいますが、販売を主とする方は、三年間かけてじっくり育てあげます。

保存は、穴を掘って貯蔵するか、カゴに入れ納屋の中で貯蔵するかです。

